

Walter de la Mare 作品における花と樹木のイメージ

Walter de la Mare 作品における花と樹木のイメージ

Images of Flowers and Trees in the Short Stories of Walter de la Mare

鬼塚 雅子
ONIZUKA Masako

要 旨

Walter de la Mare, an English poet and novelist, vividly describes scenes in his short stories. His descriptions are very impressive. Sometimes they are very realistic and lively, while at other times they are like a fantasy. His works tend to clearly describe the scenes of childhood memories which flash across his mind. He is especially talented at describing the delicate atmosphere of the scenes. He often attaches greater importance to descriptions than to plots. That is why some of his stories have an ambiguous ending. As his scenes are based on English countries in peaceful and somewhat old-fashioned times: fields, moor, forests, gardens, hills and, a variety of flowers and trees are essential in his works. In this paper I will explore the images and effects of plants in his short stories. I will also consider how flowers and trees are related to the psychology of some characters in his works and to the development of his stories.

はじめに

英国の詩人たちは多くの植物を愛し、作品の中で詠ってきた。樹齢何百年の樹木や、華やかな蘭、どこにでも見られるタンポポやクローバーなど、文学に現れる植物は数え切れない。ラッパ水仙といえば誰もが Wordsworth (1770-1850) の詩“On Daffodils” (1806)

や R. Herrick (1591-1634) の詩 “To Daffodils” (1634) を思い出すであろうし、墓場を描くことで知られている Thomas Gray (1716-1771) の詩 *Elegy Written in a Country Churchyard* (1751) にイチイの木 (yew) が登場するのを自然に受け止めるであろう。バラ (rose, *Romeo and Juliet* 1594-95)、ヘンルーダ (rue, *Hamlet* 1600-01)、三色堇 (pansy, *A Midsummer Night's Dream* 1595-96) など Shakespeare の作品には実に様々な草花が見られる。ヒース (heath) と言えば、Emily Brontë (1818-48) の『嵐が丘』 (*Wuthering Heights* 1847) がすぐに思い浮かぶように、小説にも同じことが言える。また、伝承童謡 (Nursery Rhymes) には “Lavender’s blue”、“Ring-a-ring o’roses”のように花の名で始まるものもある。このように文学と植物の繋がりは深い。聖書やギリシャ・ローマの古典文学から現代の英文学に至るまで、植物の登場しない文学はない。これまで多くの研究者たちによって、詩を中心に文学と植物の関係が詳しく論じられ、事典も編集されてきた。

詩人である Walter de la Mare (1873-1956) の小説における情景描写は印象的である。時には美しく幻想的に、時には恐ろしくリアルに描かれる。詩人の心に浮かんだ情景を、その微妙な雰囲気まで詳細に表現しようとするため、その物語の筋が犠牲になってしまう傾向がある。そのため、彼の小説は短編も長編も、その展開の仕方がやや強引だったり、曖昧な終わり方を迎えているものも少なくない。彼が描く情景描写は幼い頃に見た光景や心の中に焼きついた光景であり、主人公たちの意識の奥にある光景でもある。そして読者である我々に鮮明な印象を残す。筋だけ追うと唐突すぎて、登場人物の内面を理解するのが難しい作品でも、de la Mare 独特の情景は読者を強くひきつけるのである。そうした情景に欠かせない要素に植物がある。古き良き英国の田園地帯、すなわち森林、丘、野原、畑、庭などが彼の作品の主な舞台であることから、植物と縁の深い作品が多いのも当然といえる。稀に、都市の喫茶店やバスの中、デパート内の売り場といった場合もあるが、それでも植物は姿を見せている。そこで本稿では de la Mare の短編小説における情景描写を中心に、植物、とくに花と樹木のもつイメージや効果を考察する。さらには、花や樹木と登場人物たちの心理状態との関係、ストーリーの展開との繋がりも探求したい。

もちろん de la Mare も私も植物学者ではないので、生物学的にみればその分類方法はやや大まかであるが、あくまでも文学における情景描写の一要素として植物を扱うことものとする。

第1章 登場する植物の分類方法

本稿では Walter de la Mare の短編小説を扱う。長編では、取り上げる植物に偏りが出してしまう傾向があるため、またできるだけ多くの作品に触れるため、*Collected Stories for Children* (1947) と *Best Stories of Walter de la Mare* (1942) の短編集 2 冊を中心に研究の分析対象とする。前者は *Broomsticks and Other Tales* (1925) から 10 篇、*The Lord Fish* (1933) から 6 篇、*The Riddle and Other Stories* (1923) から 1 篇の計 17 篇からなる。しかし実際にはそれらの短編集の出版以前に雑誌で発表された作品もあり、執筆期間は 1900 年から 1933 年まで約 30 年の幅があるが、多くは 20 年代半ばから 33 年までである。カーネギー賞を受賞していることからわかるように、子ども向けの話が多い。一方 *Best Stories of Walter de la Mare* は *The Riddle and Other Stories* (1923) から 4 篇、*One the Edge* (1930) から 4 篇、*The Connoisseur and Other Stories* (1926) から 3 編、*The Wind Blows Over* (1936) から 5 篇の計 16 篇で、子ども向けの話はない。こちらの執筆期間は 1900 年から 1936 年まで 40 年近い幅があるが、多くは 20 年代半ばから 30 年代半ばまでである。全体的に前者は明るくファンタジー的要素をもつ作品が目立つが、後者は暗い雰囲気の中で描かれる人間の奥深い心理描写が印象に残る。従って対照的な作品集を二つ取り上げることになる。

まずどのような植物が作品に出てくるのかを調査した。あくまでも文学作品に作家が描く植物であるから、分類も生物学的に厳密というわけにはいかない。作者の描く上でのイメージを尊重して、おおよそ以下のような分類を試みた。

- 1 草花（花をつける野草を中心に）
- 2 草（本来なら 1 に含まれるが、緑の印象が強いので、花というより草と捉えた方が自然であるもの、シダ・ツタや地衣類（苔）も入る）
- 3 低木あるいは灌木
- 4 樹木（果実=果物も含む）
- 5 木の実（明らかに樹木ではなく、木の実を取り上げている場合 果物は含まれない）
- 6 分類がむずかしいもの

本稿で論じるのは植物を扱った情景描写が中心であるから、明らかに食材として扱われているもの、模様として描かれているもの（バラ模様の皿や菊模様のガウンなど）や加工

品（樅材の箱やテーブルなど）は分類の項目のところに具体例としてあがっていても、統計表からは省いてある。草木や雑草（**tree, grass, weeds**）など漠然とした表現のものは省き、草木の名がはっきり述べられている場合のみ取り上げた。また、あくまでも言葉として扱われる植物であるから、名詞だけでなく、形容詞や過去分詞も含めることにした。その場合、統計表では、名詞がある場合はその中に含め、名詞が無い場合のみ数えることにした。同じ植物が繰り返し登場しても一回とみなすからである。

題材として扱う作品名をすべて表記すると長くなるので、以下のように省略したアルファベットを用いることにする。

Collected Stories for Children (1947)

1. Dick and the Beanstalk	D
2. The Dutch Cheese	DC
3. A Penny a Day	P
4. The Scarecrow	S
5. The Three Sleeping Boys of Warwickshire	W
6. The Lovely Myfanwy	Y
7. Lucy	L
8. Miss Jemima	J
9. The Magic Jacket	M
10. The Lord Fish	F
11. The Old Lion	OL
12. Broomsticks	B
13. Alice's Godmother	A
14. Maria-Fly	f
15. Visitors	V
16. Sambo and the Snow Mountains	SS
17. The Riddle	R

Best Stories of Walter de la Mare (1942)

1. The Almond Tree	(AT)
2. Miss Duveen	(MD)
3. An Ideal Craftsman	(I)
4. Seaton's Aunt	(ST)
5. Crewe	(C)
6. Missing	(G)
7. Miss Miller	(MM)

8. The Orgy (O)
9. The Nap (N)
10. Physic (Ph)
11. The Picnic (Pi)
12. All Hallows (AH)
13. The Trumpet (TR)
14. The House (H)
15. 'What Dreams May Come' (WD)
16. The Vats (VA)

- 1 草花 (flowers, wild flowers) 主に一年草、二年草、多年草で、つる草あるいはよじ登り植物を含む。具体的に花の名が述べられているとは限らない。しかし、ここでは花の名が出てきたもののみを取りあげる。(和名も様々あるので、二通りあげているものもある。)

arum : アルム (O) 葬式用の花として

⇒ cuckoopint: テンナンショウ (天南星) wild arum とも lords-and-ladies ともいう。

beans : 豆 D

bindweed : セイヨウヒルガオ (白、ピンク) (AH)

bluebell : ツリガネソウ、ブルージャスミン (堇青) S

bryony (=briony) : ブリオニア (白、黄) DC L

bugloss : ウシノシタグサ、シベナガムラサキ (青) P

buttercup : キンポウゲ (黄) J V L

candytuft : キャンディータフト、マグリバナ (白～淡紫) B M

celandine : lesser celandine : バイカルキンポウゲ {キンポウゲ科} (黄) V

[greater celandine : クサノオウ (と同属) 黄]

chicory : キクニガナ、チコリ (青) (WD)

clematis : センニンソウ {キンポウゲ科つる植物} S L

イギリスで最も多い種類は Traveller's Joy = traveler's-joy (道行く人を楽ませるから) でヴィタルバとも呼ばれる (白～クリーム色)

convolvulus : ヒルガオ L Y

学名 convolvulus arvensis = bindweed : セイヨウヒルガオ、サンシキヒルガオ (白、ピンク) 巻きつく or 地面を這う多年草

学名 convolvulus cneorum = silver bush (ピンク⇒白) 小型低木

cowslip : (キバナノ) クリンザクラ {サクラソウ科} (黄) J

crocus : クロッカス (球根植物) (黄) (AT) (Pi Ph 比喩) (N 比喩)

chrysanthemum : 菊 (AT 模様なので統計表からはずす)

daffodil : ラッパズイセン (黄)					V
dandelion : タンポポ (黄)	S	L	J	A	P
dandelion-clock : タンポポの綿毛状の頭部					
【本来は含むべきではないが、敢えて数に入れた】					J
daisy : ヒナギク (白)		J	L	A	P
daisy-chain J					
daisy-stalk J					
dock : (ヒメ) スイバ、スカンポ、ギシギシ (淡緑?)					L
eyebright : コゴメグサ アカバナリリハコベ (白 or 薄藤桃?)					DC
fennel : ウイキョウ (薄黄)					(AH)
fleabane : ヒメジョオン、ノミヨケソウ (黄)					(AH)
fool's parsley : アエツス (白)					L
forget-me-not : 忘れな草 (青)					A
foxglove : ジギタリス、キツネノテブクロ (ピンク or 紫)					F
geranium : ゼラニウム、フウロソウ (紫、ピンク)				M	f
groundsel : ノボロギク (黄)					L
harebell : イトジャシン (青)					L
hemlock : ドクニンジン (白)					(AH)
hemp agrimony (hemp-agrimony) : キンミズヒキ (ピンク、ピンクがかった紫)					
または、キク科ヒヨドリバナ属の各種の植物					(AH)
hollyhock : タチアオイ (色とりどり)					(ST)
hop : ホップ、セイヨウカラハナソウ (緑、淡緑)					L
jack-in-the-hedge :					A
jack-by-the-hedge = garlic mustard : アリアリア {アブラナ科} 白 のことか?					
kingcup : リュウキンカ (marsh marigold) または キンポウゲ (buttercup) (黄)					J
lilies < lily : ユリ (白)				W	F
mallow : アオイ (ピンク～紫)					f
meadow-sweet : シモツケソウ (セイヨウナツユキソウ) (黄、クリーム色)					J
michaelmas daisy : ミカエルマス・ディジー、ウラギク、浜紫苑 (紫、白)					(ST)
mint : ハッカ (紫)					Y
pea(s) : エンドウ豆				D	DC
pimpernel : ルリハコベ (赤、黄)					DC
pink : ナデシコ属の総称 (白、ピンク、深紅)				S	Y
plantain : オオバコ (薄緑、薄褐、黄緑、黄がかった褐色)					L
primrose : サクラソウ (薄黄)					A
evening primrose : (メマツヨイグサ) マツヨイグサ (黄)					Y
ragwort : サワギク、ヤコブボロギク、ノボロギク (黄)					(AH)
sea-lavender : イソマツ、ハマベンケイソウ、ハマラベンダー (薄紫～紅藤色)					P

sea-pink (=thrift : ハマカンザシ) (ピンク・赤・白)				P
sea-poppy (=horn poppy ツノゲシ)				(AH)
図鑑に sea-poppy はない、yellow horned poppy と同じと考えられる				(黄)
snapdragon : キンギョソウ (ピンク、紫)				P
snap-dragoned				(ST)
snowdrop : マツユキソウ、ユキノハナ (白)	(G)			(AT)
snowflower : ユキノハナ? snowflake (オオマツヨイグサ) のことか?				SS
snow-thistle : ノゲシ				DC
sorrel : ギシギシ、スカンボ、スイバ (白、ピンク)				P
wood sorrel : コミヤマカタバミ (白)				
stitchwort : ハコベ (白)				A
stock : ストック、アラセイトウ (紫・ピンク・白)				(MD)
sweet william : アメリカナデシコ (色とりどり)		M		(MD)
stock (アラセイトウ) や snapdragon (キンギョソウ) と共に、昔から田園で愛されてきた草花				
thistle : アザミ (紫、ピンクなど)	DC	L		P
thistledown : アザミの冠毛 (綿毛) 【本来は含むべきではないが、敢えて数に入れた】				
	DC	Y	OL	(MM)
violet : スミレ (紫)		A	(AT)	(N)
viper's bugloss : シベナガムラサキ (青、青紫、紫)			(AH)	
virginia stock : ヒメアラセイトウ			B	M
wall-flower : ニオイアラセイトウ (黄～オレンジ)	S		P	(AT)
water-lily : スイレン (白は white water-lily…ヒツジグサ 黄)				S
wild thyme : タチジャコウソウ (ピンクがかった紫、淡紅)				(O)
=mother-of-thyme : イブキジャコウソウ				
everlastings : 永久花、乾燥花《乾燥しても形や色が変わらない花、キク科ムギワラギク属の花》菊科の草				(C)

2 花というより草のイメージ、緑のイメージが与えるもの (花を思い浮かべる人はいないだろう)、地衣類 (苔) など

nettle : イラクサ 雄花と雌花 (淡黄)	F	J	B	(AH)
reed : 葦		F	S	
rush : イグサ、トウシンソウ (灯心草)		F	S	
rush basket		P		
bulrush : フトイ、ガマ (蒲) [reed mace ガマ]		(C)	(ST)	(AT)
雄花=黄 雌花=赤褐色				

bracken : ワラビ	F	Y	D	(AH)	(ST)	(AT)
=fern : シダ (bracken は fern の種類の一つ)						M
ivy : ツタ、キヅタ よじ登り植物 (緑がかった黄)	L	P	B(C)	(AT)		
ivied walls	P	ivy-shadowed hollow	P			
moss : 苔 (=石・古木・湿地などに生える隠花植物の俗称。根・茎・葉の区別がない)						
L	F	J	A	SS	(AT)	(H) (WD) (VA)
mossy	F	moss-clotted, moss-greened	F			mossed (VA)
lichen : 地衣類 (=担子菌植物の一つ、菌類と緑藻類との共生体、ハナゴケ・サルオガセ・ウメノキゴケなど)				J	(H)	(VA)
lichenous				J	L	B

3 低木あるいは灌木 (実のなるものが多い)

bramble : 木いちご、クロイチゴ (白、ピンク、紫)	DC	S	B(TR 聖書)			
blackberry とも呼ばれる		J				
raspberries : 木いちご [バラ科のキイチゴ属植物の総称]		bramble とも呼ばれる				
(MD)では食べ物 (ジャム) として描かれているので統計表から除外する						
coral-coloured berries		J				
briar, brier, wild-rose 野バラ、イバラ		F	L			
sweet-brier = sweetbriar : 野バラ		(VA)				
rose : バラ	F	L	B	f	Y	(ST)
rose-bush	Y	rosebud	f	rose-tree	f	
currant : スグリ		DC	V	M		
elder : ニワトコ [スイカズラ科落葉性灌木]		W	(N elder-tree)			
gardenia : クチナシ (純白)		(O)	葬式用の花?			
gooseberry : 西洋スグリ、グズベリ、マルスグリ		P	M			
gorse (=furze) : ハリエニシダ (黄)	L	J	P	(AH)	(ST)	(AT)
furze-bush	P					
black grapes : 黒葡萄 (比喩、聖書)		(C)				
hawthorn : サンザシ	S	A	P	(AT crimson hawthorn-tree)		
=thorn : イバラ、サンザシ	S B	(AT Thorns 「いばら荘」と家の名なので統計表からははずす)				
thorn-tree		A				
whitethorn (= hawthorn)		B				
特にイングランドでは thorn といえば、サンザシ (hawthorn or whitethorn) とリンボク (sloe or blackthorn) が浮かぶ						
(blackthorn	D	blackthorn のこん棒なので統計表からは除外する)				
=may : サンザシ	may-bushes	J				
fuchsia : フクシア (ヒョウタンソウ、ツリウキソウ) (紫紅)		(AH)				

hazel : ハシバミ			V	
heather : ヒース		L	(AH)	(AT)
=heath : ヒース			P	(AT)
holly : 西洋ヒイラギ (灌木または常緑樹)	A	OL	(I)	(WD)
ilex = holm oak : ウバメガシ、西洋ヒイラギ (トキワガシ、ナラ属常緑樹)	A			(WD)
honey suckle : スイカズラ、ニオイニンドウ (クリームがかった白⇒黄) よじ登り低木				Y
Jessamine=jasmine : ジャスミン (薄黄 or 白)			S	Y
juniper tree : ネズの木			(TR)	聖書)
juniper : ネズ、トショウ	ビャクシン (レダマの木 : 聖書)			J
mistletoe : ヤドリギ			OL	(AT)
osier : コリヤナギ		W	S	(MD)
quince : マルメロ、カリン [バラ科の灌木]			F (実)	
sloe bush : リンボクの茂み、スモモの茂み			B	
sloe : blackthorn [リンボク] の実	野生スモモ、スモモの実			
sloe : リンボク 棘のある灌木、枝の色が黒味をおびているので、blackthorn と呼ばれる、白い花				
strawberry				(AT)

4 樹木 (木の実、果実がポイントの場合もあるが、自然の中にあるのではなく、屋内で食べ物として出てくる場合には*をつけ、統計表からは省いた)

green apples : 青リンゴ (実)		W	Y	(AT)
apple-scented	(AT) …	これは自然界の描写ではないので省く		
apple(s) : リンゴ	P (木)	Y (魔法のリンゴ 何回も出てくる)	D (実)	* (TR) (実) *
apple tree : リンゴの木 [バラ科の果樹]		P		
	B (lichenous apple-trees)		M (tufted old apple-trees)	
apricot : アンズ [バラ科の落葉性高木]			F (実)	
alder : ハンノキ [落葉樹]			(MD)	
almond tree : アーモンドの木 [バラ科の落葉果樹]			(AT)	
ash : (西洋) トネリコ [落葉性森林樹]			W	
beech : ブナ [落葉性森林樹]	A	Y (登場回数が多い)		(C)
beech tree, beech-tree, beech-trunk	Y		beech-leaf	L
birch : カバ (の木) [落葉性森林樹]		V	J	
box-wood : ツゲの木 [常緑樹]			(MM)	
bread-fruit tree : パンノキ		S		
cedar : ヒマラヤスギ、ビャクシン [常緑針葉樹]		R	A	(H)
cedar tree : ヒマラヤスギ、ビャクシン		(I)		

cherry tree : 桜の木	S			
cherries : 桜 (木)	P	サクランボ (実)	(VA)	
chestnut tree : 栗 (の木)	L	(MM)		
chestnut gallery	D			
cypress : イトスギ [常緑針葉の灌木または樹木]			D	
damson tree : スモモの木、セイヨウスモモの木 [落葉性低木] (plum の改種)			(MD)	
deal washstand : モミ材の洗面台			(MD)	
elm : ニレ [ニレ科高木]	V	(AT)		
fir : モミ [常緑針葉樹]				
fir-copse : モミの林	(G)			
fir-tree	(AT)			
fir-cone (実)	(AT)			
hickory limb : ヒッコリーの枝 [クルミ科高木]	S			
larch : カラマツ [マツ科の高木]	S			
lime : ライム、シナノキ	W	SS (lime tree)		
= linden : シナノキ、菩提樹 [落葉性高木]	SS	(MD) (AT)		
monkey-puzzle : チリマツ (ナンヨウスギ属)	V			
oak : カシ [ブナ科の樹木の総称]	V	A	(G)	
oak tree (TR 聖書)		an old oak chest	R	
oak table Y		oak door A	oak casement A	
scrub oak : 低木ナラ、ヒラギガシ			P	
peach : モモ [バラ科の果樹]			F (実)	
pear tree : ナシの木 [バラ科の果樹]	M	SS	(AT)	
pears : セイヨウナシ			(MD)	
pine tree : マツの木 [マツ科の高木、常緑落葉樹]		SS		
pine wood : 松の森		(N)		
plane tree : スズカケの木、プラタナス [落葉性闊葉樹]		M	OL	
plum-tree : セイヨウスモモ、プラム [バラ科の果樹]		P		
poplar tree : ポプラ [落葉性高木]		SS		
sycamore : サイカモカエデ、オオカエデ		M	(ST)	
willow tree : ヤナギ [落葉性樹木、または灌木]	W	Y	P	
yew : イチイ [イチイ科の高木、常緑樹]	A	F	(TR) (WD)	

5 木の実

acorn : ドングリ	V	(MM	栗の実か?)	(VA	green acorn)
acorn-shaped, acorn chin 《比喩》		A			
nut : 木の実 特に walnut または chestnut					

	Y	OL	(C)	(TR)	(N 比喩)	(Ph)
nut-shaped	M					
walnut : クルミ	(C)					

6 分類が難しいもの

mangrove : マングローブ [熱帯樹 高木及び低木] OL

palm : ヤシ、シュロ [熱帯・亜熱帯のヤシ科の多年生植物] OL (O)

palm tree : 椰子の木、シュロ M OL (G)

上記は樹木か灌木の類に入れるべきかもしれないが、マングローブは種類が多く高木・灌木・シダ類とまたがっているので、分類は不可能である。これらは熱帯の植物ととらえ、1～5に入らないものとして6の中にいれた。

以下の3つは一応ここにあげるが、統計表からははずす。

toadstool : キノコ M

mushroom : マッシュルーム Y (VA)

herb : 薬草 F B

それぞれの作品に何種類の植物が描かれているか、分類ごとに数を示す。(同じ植物が何回出てきても一回とみなす。)ただし、図鑑や事典では同じ植物とされていても、作者の意図を考慮して、異なる単語(植物名)や綴りを用いている場合はそれぞれ数えた。(例えば、同じ作品内に出てくる *rosebush*、*rosebud*、*roses* は同じとみなし、一回しか数えないが、*hawthorn* と *thorn* と *whitethorn*、*heath* と *heather* は別々に数えた。)

		分類	草花	草	灌木	樹木	〔果実〕木の实/ 熱帯樹
<i>Collected Stories for Children</i>	分類番号		1	2	3	4	5/6
1. Dick and the Beanstalk	D		2	1	0	1	0
2. The Dutch Cheese	DC		7	0	2	0	0
3. A Penny a Day	P		9	2	5	5[1]	0
4. The Scarecrow	S		6	2	5	4	0
5. The Three Sleeping Boys of Warwickshire	W		1	0	2	4[1]	0
6. The Lovely Myfanwy	Y		5	1	3	2[2]	1/0
7. Lucy	L		13	3	5	2	0
8. Miss Jemima	J		7	3	4◇	1	0
9. The Magic Jacket	M		4	1	2	4	1/1

10. The Lord Fish	F	2	5	3	1[2]	0
11. The Old Lion	OL	1	0	2	1	1/2
12. Broomsticks	B	2	3	5	1	0
13. Alice's Godmother	A	7	1	4	4	1/0
14. Maria-Fly	f	2	0	1	0	0
15. Visitors	V	3	0	2	4	1/0
16. Sambo and the Snow Mountains	SS	1	1	0	5	0
17. The Riddle	R	0	0	0	1	0

◇coral-coloured berries という植物（灌木と考えられる）も含まれている

		〔果実〕 木の実/				
		分類	草花	草	灌木	樹木 熱帯樹
<i>Best Stories of Walter de la Mare</i>		分類番号	1	2	3	4 5/6
1. The Almond Tree	(AT)	4	4	6	5[2]	0
2. Miss Duveen	(MD)	2	0	1	3	0
3. An Ideal Craftsman	(I)	0	0	1	1	0
4. Seaton's Aunt	(ST)	3	2	2	1	0
5. Crewe	(C)	1	2	1*	1	2*/0
6. Missing	(G)	1	0	0	2	0/1
7. Miss Miller	(MM)	1	0	0	2	1/0
8. The Orgy	(O)	2	0	1	0	0/1
9. The Nap	(N)	2	0	1	1	1*/0
10. Physic	(Ph)	1*	0	0	0	1*/0
11. The Picnic	(Pi)	1*	0	0	0	0
12. All Hallows	(AH)	8	2	3	0	0
13. The Trumpet	(TR)	0	0	2**	1[1**]	1/0
14. The House	(H)	0	2	0	1	0
15. 'What Dreams May Come'	(WD)	1	1	2	1	0
16. The Vats	(VA)	0	2	1	[1]	1/0

*は植物（花）が比喩表現としてのみ使われている。

**は聖書からの引用の中にある。

第 2 章 Walter de la Mare の好む草花と樹木

第 1 章の分類によれば、de la Mare の作品で最もよく描かれる草花はタンポポ（dandelion）、ヒナギク（daisy）、ツタ（ivy）、シダ（bracken）、苔（moss）、灌木

はバラ (rose)、ハリエニシダ (gorse)、サンザシ (hawthorn, thorn, may)、ヒース (heath, heather)、ヒイラギ (holly)、樹木はカシ (oak)、樹木の果実ではリンゴ (apple, green apple) である。野草の花の色からみると、黄、白、ピンクが多い。青、紫もよく見られる。灌木の花についても同様に、黄、白、ピンクが多い。また、花のない（植物学的にはあったとしても作品上では描かれない）緑のみのワラビ (bracken) と苔の使用頻度が多いことに驚く。タンポポとヒナギクは世界中どこにでもある、誰もが知っている野草であるから、数多くの作品の中にたびたび登場しても何の不思議もない。だが、*Collected Stories for Children*の作品にのみで、*Best Stories of Walter de la Mare*の作品には見られない。子どもが主人公のファンタジー的な作品で、英国の自然の中、野原や畑あるいは庭（きちんと整理されていない）にヒナギクとタンポポはのびのびと咲いている。ヒナギクは物怖じせず、邪心・屈託のない風情があるので、無心 (innocence) の象徴として、しばしば懐かしの幼少時代、汚れを知らぬ童心に結び付けられる。¹ タンポポも「子どもの好きな花のひとつで、幼い思い出とも直結する」²が、まさにその通りである。おそらく読者は作品の子どもに幼い頃の自分を重ね、知らないうちに懐かしい昔の日々を思い出すのであろう。そして純粋無垢な子どもが主人公だからこそ、妖精（あるいはそれらしき存在）に遭遇するのであろう。この他にde la Mareの作品でよく見られるキンポウゲ (buttercup) やキバナノクリンザクラ (cowslip) も子どもが好きな花、童心を懐かしむ花で、妖精に愛される花でもある。³ 下記の引用はまさにそれを証明する場面である。（以下、引用文中の植物名あるいはそれに類するものを示すためにボールド体を用いる。）

‘ . . . I would climb up this very hill. And sometimes I would creep across the field to that little church.

‘It was there I most easily forgot myself and even my little scrapes and troubles—with the leaves and the birds, and the blue sky and the clouds overhead; or watching a snail, or picking **kingcups and cowslips**, or

‘ There never were such **buttercups and dandelion-clocks and meadow-sweet** as grew beneath those old grey walls. I was happy there;⁴

‘There are a few old oak pews in the little church, . . . I could be intent on **my daisy-chain** (“Miss Jemima” C p.190.)

バラ (rose) はイングランド (英国) の国花であり、英詩の世界では重要な役割を果たしてきた。野バラ (briar, sweet-brier) も含めれば、灌木の中では数々の作品の中で最も多くその姿をみせている。サンザシ (hawthorn, thorn, may) とヒース (heath, heather) もまた、英文学では欠かせない植物であり、de la Mare の作品にもよく登場している。

灌木の中で注目すべきはハリエニシダである。ハリエニシダはgorseまたはfurzeであるが、de la Mareはgorseの方を多く用いている。この灌木は英国ではごくありふれた植物だが、伝承・民話の類が全く無いと『英米文学植物民俗誌』に書かれてあるように⁵、Katharine M. Briggs (1898-1980) の妖精関係の書物を調べても妖精との関わりは見当たらない。ハリエニシダが出てくる作品は、“Lucy” “Miss Jemima” “A Penny a Day” “The Almond Tree” “Seaton’s Aunt” “All Hallows”など妖精が出てくるファンタジー的な作品から、不気味な家や大聖堂が舞台となるゴシック的な作品までさまざまであるが、超自然的な存在や気配という共通点がある。また登場人物たちはそれぞれ孤独感を抱いている。“Lucy” “Miss Jemima” “A Penny a Day” “The Almond Tree”の主人公は少女か少年（ただしLucyの場合だけは主人公が年老いるまで描かれている）で、家族と死別していたり、事情があって別居していたり、一緒にいても心が離れていたりと、何らかの理由で一人で寂しく過ごす時間が長い。“Seaton’s Aunt”では亡霊のような老婦人が登場し、“All Hallows”では大聖堂の堂守りに狂気を感じる。二人は共に建物に囚われているような暗い雰囲気を漂わせた孤独な人物である。こうした作品にハリエニシダが咲いているのは、前出のタンポポやキンポウゲと同じ花の色である黄色と茂み（茂みは妖精にとって神聖な場所であるという⁶）にde la Mareが心を捉えられたのであろうか。

さて、色の鮮やかな草花や灌木と対照的なのは、シダ（ワラビ）・ツタ・苔である。これらは作品の中では強烈な緑のイメージを与える。しかも使用作品が多岐にわたり、頻度も高い。当然のことながら、うっそうと草木が茂り、人を容易には近づけがたい森の様子を描く場面にはシダや苔は欠かせない。

Then all was still. John peered about him; he had never felt so lonely in his life. Never even in his dreams had he been in a place so strange to him as this. The **foxgloves** and **bracken** of its low hills and hollows showed bright green where the sunshine struck through **the great forest trees**. Else, so dense with leaves were their branches that for the most part there was only an emerald twilight beneath

their boughs. And a deep silence dwelt there. . . .

And he came at length to a gentle slope waist-high with **spicy bracken**, and at its crest found himself looking down on the waters of a deep and gentle stream flowing between its hollow **mossy banks** in the dingle below him. (“The Lord Fish” C p.238.)

暗い静まり返った森の様子が木々の枝や葉だけでなく、シダ（ワラビ）によって湿った土地柄を表現する。“The Lord Fish”では、魚釣りが大好きな主人公の **John** をシダが川のある方へ誘導しているようである。そのシダの茂り方は、人の入り込まない禁断の土地へ主人公が除々に入り込んでいく場面に効果的である。そして人魚のような美しい不思議な娘に出会った後、不思議な軟膏の力で **John** は魚に変身してしまう。その姿は苔を用いて繰り返し描かれている。

And still muffled up in his (i.e. John's) thick green overcoat of **moss**

Then, with an earthenware watering pot, and each in turn, she (i.e. the larder-maid) sprinkled the **moss and weed and grasses** in which John and his fellows were enwrapped. (“The Lord Fish” C p.253.)

. . . John's fellow fish, trussed up around him in their **moss and grass and rushes** on their dishes, (“The Lord Fish” C p.256.)

She (i.e. the larder-maid) stripped off his verdant coat of **moss**, (“The Lord Fish” C p.259.)

“The Lord Fish”における苔やシダ（ワラビ）の使い方はやや暗さはあっても決して重苦しくはない。全体に漂う静かな、不思議な、魔法を匂わせるような雰囲気作りに一役かっているといえよう。現実の姿をすっぽり包むことで、苔は登場人物に魔法をかけ、変身をも可能にさせるのである。

一方、“Miss Jemima”ではそれらの植物の描かれ方が独特である。少女 **Susan** は、妖精がわざと置いていったと信じる草の実を口に入れた瞬間に、それまで感じたのこともない不思議な感覚にとらわれる。

. . . stretched my hand across, plucked **one of the berries**, and put it

into my mouth.

‘Hardly had **its juice** tartened my tongue when a strange thing happened. . . .

‘But there was still that dazzle in my eyes, and everything I looked at—**the flowers** and the birds, even **the moss** and **lichen** on the old stones—seemed as if they were showing me secrets about themselves that I had not known before. (“Miss Jemima” C pp.184-85.)

普段はなじみが薄いというより近寄りがたい古い墓石の上の苔や地衣までも、自分に心を寄せているように感じるというのは余り例を見ないだろう。少女が一人ぼっちの寂しい境遇にあるだけでなく、意地悪な家政婦にいじめられる日々を送っていたため、いささか可愛げのない性格になっていたからかもしれない。また、幼い頃に似たような体験をした de la Mare 自身の思い出を重ねている可能性もある。

「わたしたち」が英国の田園の中を散歩しながら、時間について語り合う“The Vats”はかなり難解な幻想的で抽象的な作品である。「わたしたち」は気がつくと未知の高原にいて、大小様々な「桶」(Vats)が空の下に浮かんでいるのを見る。

. . . I scanned their (i.e. Vats’) enormous sides, shaggy with tufts of a **monstrous moss** and scarred with yard-wide circumambulations of **lichen**. Gigantic grasses stooped their fatted seedpods from the least rough ledge.⁷

このぞっとする想像を超えた情景を、語り手は「彼らは言いようのない平和の表象のように見える。ノア以前の何世紀もの間、…リヴァイアサンのように無害なのだ」(“Far rather they seemed to be emblems of an ineffable peace; harmless as, centuries before Noah, were the playing leviathans. . . .” “The Vats” B p.394) という。さらに桶を観察すると、以下のように、「桶」が緑色に包まれ、時間を超えた存在であることが除々にわかってくる。

Obviously their mucous incrustations and the families of weeds flourishing in their interstices were of an age to daunt the imagination. (“The Vats” B p.395.)

. . . , and yet have left all but unmarked and unscarred those **mossed** and **monstrous** laminæ. (“The Vats” B p.397.)

苔の群生地は湿地でもあるため、そこでは埋もれた動物の死体が完全な保存状態で見つかることも少なくないという。⁸ 苔の群生地には静寂が伴い、湿地には水が伴う。そう考えれば、人間にとって完全には理解不可能だが、決して切り放せない時間という概念を描く作品に苔や地衣類を用いたことも納得できる。「桶」から受ける感動と想像力を超えた深さと大きさから、「わたしたち」は圧倒され、見とれ、自分たちの存在を無の中に沈めてしまったように感じる。そして語り手は最後に「純粹時間 (Time-pure)」があることを知ったと言う。

樹木は草木ほど使用頻度が極めて高いとは言えないが、カシ (櫟)、ブナ、ヒマラヤスギ、シナノキ (菩提樹)、ヤナギ、イチイが目につく。リンゴやナシの木もよく出てくるのは果樹園の情景を描くためであるし、魔法や不思議な雰囲気を出すためでもある。カシ (oak) の木について後で論じるが、長寿であり神聖な木とされ、妖精が住み着くといわれていることから、英文学の作品に登場するのは当然である。de la Mareの場合、単なる樹木としてだけではなく、ドア・テーブル・窓枠・櫃 (大型の箱) といった加工品としてもよく登場する。カシの木が 'Monarch of the Woods' なら、'Mother of Forests' と呼ばれているブナの木 (beech) は古くから神の木としても崇められていた⁹ という。そのブナを de la Mare は "The Lovely Myfanwy" の中で集中的に用いている。主人公の美しい Myfanwy は、大きなブナの木の下に立ったままよりかかって眠り込んでいる若者と偶然出会い、二人は恋に陥る。その後も若者を描く場面には必ずと言ってよいほどブナが登場する。ブナは「その堂々たる樹形、優雅な枝ぶり、つややかな緑の若葉など、大型森林樹としては最も美しい」¹⁰ とみなされていることから、実は王子である高貴な若者が登場する場所としてこれよりふさわしいところはないと言える。

シナノキ (菩提樹) は英語では linden と lime があり、両者は同じとされている場合が多い¹¹ が、『英語歳時記 夏』では lime について「異なったふたつの植物がこの名 (ライム、しなのき) で呼ばれている」¹² と記述されている。"Sambo and the Snow Mountains" では linden が 3 回、lime が 1 回と両方出てくるが、物語の筋から判断して同じ木と考えられる。これは肌の色が白人のように白くなりたいと願いつづけた黒人の少年の話だが、花は snowflowers が 2, 3 本出てくるだけで、以下にあげるように樹木か灌木がほとんどである。

..., the boys in the streets under the bread-fruit trees

(“Sambo and the Snow Mountains” C p.373.)

... in the doctor's garden under a **blossoming pear-tree**. (C p.378.)

... under some bushy **linden** trees, (C p.379.)

... under the **linden** trees! ... under the **green lime** trees (C p.380.)

..., crept past the whispering **poplar trees**, (C p.383.)

The **pine trees** by the wayside, following the **pine trees** (C p.386.)

... under the **linden** trees, (C p.394.)

菩提樹は **lime** であろうと **linden** であろうと夏に描かれる樹木である。上にあげた引用の中で、最後に出てくる菩提樹は回想としてなので、初めの 3 回は主人公の **Sambo** が雪山の国へ行く前に登場する。黒人の少年である **Sambo** は菩提樹の木陰で主人の医師のもとに来た手紙をこっそり開封する。彼は「雪の山、白い斜面」という住所に惹かれ、白くなりたいという異常なまでの願望から、罪の意識のないままそこに住む病人の老婦人のもとへ自分が医師の代理として行くことにする。途中で松の木を頼りに **Miss Bleech** (**bleech** と同じ発音の **bleach** には「白くする」という意味がある) の家へ向かう。たどり着いた先には緑の植物はない。「雪の中でこんもりともりあがっている木や灌木」 (“**Trees and bushes heaped in snow and glistening in the sun of evening met his wondering gaze.**” “**Sambo and the Snow Mountains**” C pp.390-91) とあるように、恐らく真っ白であろう木々が目に浮かぶ。それほど強調することもなく、さりげなく、登場する木々の種類で情景の変化が描かれている。

ヤナギ (**willow**, コリヤナギ**osier**) は日本人が描くイメージとは全く異なる。イギリスでは憂鬱・喪の象徴で、水辺に枝葉を垂らしているその姿から悠々と流れる水と対比され、ゆらゆらと枝を振って人を自殺に駆り立てる一方、魔女はヤナギの根に座って悪魔に魂を売り、その木陰に出没するという。¹³ また、夜にはヤナギが自分の根を抜いて伸び上がり、旅人の後ろでぶつぶつ言うという。¹⁴ しかし **de la Mare** のヤナギは神秘的な雰囲気はあっても、決して不気味ではない。“**The Three Sleeping Boys of Warwickshire**” では、純粋な心をもった煙突掃除の少年達にとって、ヤナギは自分たちの魂を夜の間だけ開放してくれる不思議な音楽を導く存在である。

... ; and so silent was the hour you could almost hear the rippling of

the river among its **osiers** (i.e. water-willows) that far away.
("The Three Sleeping Boys of Warwickshire" C p.100.)

昼間は冷酷な親方のもとで苛酷な労働を強いられているが、夜眠っている間、その魂は身体を抜け出し、飛ぶように軽やかに踊るのである。

. . . , there flitted past his three small 'prentices—just the ghosts or the spirits or the dream-shapes of them—faring happily away. They passed him softer than a breeze through a **willow tree**
("The Three Sleeping Boys of Warwickshire" C p.104.)

そしてヤナギの木が長くのびすぎないように枝が刈り込まれて丸く輪のように並んでいるところ ("a circle of pollard and stunted willows" C p.110.) に、霜をかぶった青い草の上に不思議な人々が寄り集まり、どこからかこの世のものとは思われない調べが立ち昇るように聞こえてくるのである。妖精という語は用いていないが、それらしいことは容易に想像がつく。

少年たちや読者には美しい神秘的な存在といえるヤナギだが、邪悪な心の持ち主には怖い存在として描かれているのが面白い。

And such an ache and ague was in Old Noll's bones as he had never, since he was swaddled, felt before. It was as if every frosty switch of **every un-pollard willow** in that gaunt fairy circle by the Itchen had been belabouring him of its own free will the whole night long. His heart and courage were gone. Sighing and groaning, he lowered himself into **the meadow**, and by the help of a **fallen branch** for staff made his way at last back into the town.
("The Three Sleeping Boys of Warwickshire" C p.111.)

見習いの少年たちを満足な食事を与えずに酷使していた煙突掃除の親方である Old Noll は、超自然的存在によって己の悪に対する罰を受けたというのだろうか。少年たちにとっては優しいヤナギが、Old Noll には "the old gnarled willows beside the icy steam" (C p.111.) と醜く見えていたのもまた興味深い。ヤナギは水辺に生息しているから、本来のヤナギではなく、自分の姿、すなわち心の邪悪さによって醜くなった外見を Old Noll は見たと解釈

できる。つまり、これは鏡に映した Old Noll 自身の姿なのである。

第 3 章 植物の機能

1. 登場人物と自然の一体化 “Alice’s Godmother”

不思議の国に迷い込んだ Alice を思わせる作品である。*Alice’s Adventures in Wonderland*（『不思議の国のアリス』1865）の Alice と違って、“Alice’s Godmother”の Alice は姉ではなく母親と外出している。教母（名付け親）であるひいひいひいひいひいひいひいひいひいお祖母さん（great-great-great-great-great-great-great-great-grandmother）の 350 歳の誕生日のお茶に招かれているのである。Alice が屋敷の門のところで馬車をおろされると、母親と別れてたった一人で屋敷の敷地、すなわち不思議な空間に入っていく。その直前に描かれている草花の描写はまるで春そのもの、言い換えれば人生の春を迎えている Alice の姿である。

It was a pleasant sunny afternoon. The trim hedgerows were all in their earliest green; and **the flowers of spring—primroses, violets, jack-in-the-hedge, stitchwort—in palest blossom** starred the banks.

（“Alice’s Godmother” C p.325.）

上記の草花は小ぶりで、花の色が淡黄、紫、白とまだ世の中に染まらない純粋な少女というイメージにふさわしい。豪華絢爛ではないが、明るく可愛らしく、英国ではどこでも見られることから親しみやすい愛すべき存在である。Alice が春の草花なら、教母のイメージは長い年月を生きてきた樹木そのものである。ブナの木も西洋スギもその長い樹齢により巨大化してしまっている。

Mammoth beeches lifted their vast boughs into the air; the dark hollows in their ancient boles capacious enough for the dwelling-house of a complete family of humans. In the distance Alice could see between their branches **gigantic cedars**, and others still further, beneath which grazed what she supposed was a herd of deer,

though it was impossible to be quite certain from so far.

(“Alice’s Godmother” C p.326.)

上記の引用に描かれる古く巨大な樹木の姿は余りに年老いた教母の自然化と考えられる。幹の中の暗い穴はこれまでの長い人生の中で教母が失ってきたもの、心を開いた穴であろう。人生の虚しさを表している。その屋敷に入る前から、敷地の門のところすでに生け垣が立ちふさがり、入り口の門番小屋の玄関には枯葉がたまっている。まるで世間を拒絶しているかのようである。

Beyond it (i.e. the gate) rose a hedge of **yew** at least twenty feet high, . . . its windows shuttered, a scurry of dead leaves in its ancient porch. . . . the dark foliage of **the ilex** behind the house.

(“Alice’s Godmother” C pp.325-26.)

イチイ (**yew**) は樹齢 1000 年に近いものもあるほど寿命が長い常緑樹であり、今では教会の墓地の木とされている。屋敷の門を入れて最初に **Alice** の目に入ったのがこのイチイの高木であるということは、**Alice** が死あるいは死に近い存在とこれから遭遇するということを暗示している。(英詩に出てくるイチイはほとんど死や死者を連想させる傾向にある。) イチイの向こうには西洋ヒイラギ (**holly**) があるが、ヒイラギのラテン語名が **ilex** であることから、**ilex** は **holly** と同じと見なされる。ヒイラギが神聖な木であることは周知の事実であり、教母が神聖な存在であることは言うまでもない。そして 350 歳という年齢は死と切り放すことはできない。むしろ死にかしずかれているのでないか、それはイチイの生け垣の取り囲まれたヒイラギの姿と重ねることができる。

門の中の屋敷へ向かう並木道はその砂利の間に苔がこんもりと厚く生えていたので、**Alice** の足音は消されてしまう。(“So thick and close were **the tufted mosses** in the gravel of the narrow avenue that her footsteps made no sound.” C p.326.) そのうえ、道の両側の大きな樹々の作る陰があまり深いので、もう夕暮れかと思うほど屋敷の周りはいすず暗い。屋敷自体が、いや敷地全体が **Alice** が世間という外界から持ってくるものを、光や足音さえも中へは持ち込ませまいとしているかのようである。

Lewis Carroll (1832-98) の **Alice** が不思議の国に通じる穴に落ちる前に白ウサギに会うように、**de la Mare** の **Alice** も教母の前に白ウサギに会う。ウサギの描写自体は現実

的なのだが（決してしゃべらず、服も着ていない）、読者はここで間違いなくあの白ウサギを思い出すに違いない。

In sheer curiosity indeed Alice made an attempt to get as near as she possibly could to a large buck rabbit that sat nibbling under the broken rail of the fence. With such success that he actually allowed her to scratch his furry head and stroke his long lopping ears.

(“Alice’s Godmother” C p.326.)

『不思議の国』のウサギの出迎えを受けたかのようにさらに進んで行くと、次はイバラ（あるいはサンザシ）とヒイラギの灌木の茂みにぶつかる。

Now and then a hunchbacked **thorn-tree** came into view, and now and then a **holly**. Alice had heard long ago that **hollies** are wise enough not to grow prickles where no animal can damage their leaves by browsing on them. These **hollies** seemed to have no prickles at all, and the **hawthorns**, in spite of their bright green coats, speckled with tight buds, were almost as twisted out of shape as if mischievous little boys had tied knots in them when they were saplings. But how sweet was the tranquil air. So sweet indeed that this quiet avenue with its towering branches and . . .

(“Alice’s Godmother” C p.326.)

イバラ（ここではイバラ＝サンザシと見なされる）もヒイラギも *de la Mare* を含む多くの英国詩人たちが好んで使う植物である。*Sleeping Beauty*（『いばら姫（眠り姫）』）に出てくる魔法のかかった城を隠しているイバラを連想するが、ここでの灌木は屋敷を覆い隠すほどではない。ただ、そのおかしい格好や周りの空気の静かな甘さが不思議の国の雰囲気をかもし出している。ヒイラギは永世（*everlasting life*）の象徴、異教徒の時代から神聖な木として崇拝されたサンザシ（春の訪れを告げる木として希望の象徴）は独特の香りを持っている。その姿からくるイメージと目には映らない香りを、Alice は幼いながらも鋭い観察力と洞察力と感性で掴んでいる。

What was really strange, this conveyance was being noiselessly driven round a circular track so overgrown with **moss and weeds** that

it was hardly discernible against the green of the grass.
("Alice's Godmother" C p.327.)

上記の引用の中で轍の跡と辺りの草の緑とがほとんど区別が付かないという表現は、Alice が現実の世界から教母の住む異次元の不思議の国へほぼ完全に入り込んでしまったことをほのめかしている。時を超えたような敷地の世界には花はほとんど不要なものである。

Alice paused again behind yet another of the huge grey boles. . . .
It (i.e. The house) looked as if it had stood there for ever. . . . Not a blossoming shrub, not a flower near by—except only a powder of **daisies and a few yellow dandelions**.
Only green turf and trees, and the ancient avenue on which she stood,
("Alice's Godmother" C pp.327-28.)

教母をイメージする樹木はイチイ、ヒイラギ、ブナ、西洋スギとあったが、屋敷に入る直前の Alice を描く文 “as she stood drawn up close to **the furrowed bark of an oak that branched overhead**.” (C p.327) から判断して、カシの樹もまたそのしわだらけな樹皮から年老いた教母を暗示している。さらに、自然に生えている庭園の樹木だけではなく、「黒っぽいカシの木の扉 (“the dark oak door” C p.336) 」、「非常に黒い古いカシ材でできた鏡版 (“panelled with the blackest of old oak” C p.336) 」、「カシの木の窓枠 (“the oak casement” C p.338) など、屋敷自体もカシを用いて重苦しい雰囲気を出している。

初めて会った Alice の眼に映る教母はどんな姿だろうか。老いのため小さく縮んでしまった姿はまさにしわだらけの樹皮であり、頭はドングリのような形をして (“her acorn-shaped head” C p.331) 、その眼は極めて薄い色をした忘れな草よりもさらにずっと薄い青い色をして (“The eyes . . . of a much fainter blue than the palest forget-me-not” C p.331) と、その外見描写に植物を用いているところがまた面白い。

Alice の台詞は極めて簡潔だが、無意識に自分と教母の違いを鋭く言い当てている。

‘The trees and park were very lovely. I have never seen such—**mature trees**, great-grandmamma. And yet all their leaves were budding and some were fully out. Isn’t it wonderful for trees so—so long in the world to—why, to come out at all?’
("Alice's Godmother" C p.335.)

むろん、年取った樹は教母であり、その樹から出ている芽は屋敷を訪ねてきたアリス自身であろう。従って彼女が古い樹木より、芽の方に感動しているのは当然である。そして教母の屋敷内では時間が止まっているか、あるいは気の遠くなるほどゆっくり進んでいるかのように感じられる。その時のゆるやかな流れが静寂を生み出しているのである。Alice は思わず、“It is a very very quiet house,” (C p.335) と言ってしまう。

教母はアリスにこの家にとどまり、命という秘密を贈ろう、世の中のうるさいことやばかげたことからすっかり離れて暮らし、死の訪れをずっと先へ伸ばそうと提案する。しかし、アリスはふつうに死を受けとめる生き方を選び、急いで扉から出ると、屋敷が森の樹々の茂みにすっかり隠れるまで息もつかず、ふりかえることもなく夢中で走り続けた。

この作品では生と死、若さと老い、時の流れが草花と樹木を用いて巧みに描かれている。

2. 心の奥深くを表す植物と庭 “Broomsticks”

家と庭は de la Mare にあってはそこに住む人自身を表すことが多い。“Broomsticks”の煉瓦塀で荒野から隔てられた庭は、家と共に明らかに主人公の Miss Chauncey の状態を象徴している。

この作品に荒野 (the moor) が多く出てくるのは、年老いた Miss Chauncey の暮らし振りと同時に彼女の心と一致するからである。Miss Chauncey は毎日規則正しい生活を送り、贅沢もせず、真面目に生きている。だが、考えるのは自分とその周囲のことだけ、目先のことだけである。それが、中にいると周囲の見えない薄暗い荒野の姿と重なるのである。また、日々近づいてくる死への恐怖を感じながら、一人きりでいることのやるせなさ、しかも一緒に暮らしている猫にも裏切られているのではないかという不安が頭を離れない。その孤独感と静寂が草木で巧みに表現されている。

The trees and bushes of the garden stood motionless; The vague undulations of the Moor stretched into the distance. Not the least stir of leaf or blade of grass. (“Broomsticks” C pp.305-06.)

暗く寂しい話でも草花は姿を見せる。だが以下の描写からもわかるように、狭い場所では種類もわずかで、その咲き方に華やかさはない。

. . . , Miss Chauncey took her usual evening walk in the garden. **Candytuft and virginia stock** were seeding along the shell-lined path, and **late roses** were already beginning to blow on the high brick wall which shut off her narrow strip of land from the vast lap of the Moor. Having come to the end of the path, Miss Chauncey pushed on a little further than usual, to where the grasses grew more rampant, and where wild headlong weeds raised their heads beneath her **few lichenous apple-trees**. Still further down, for hers was a long, though narrow, garden—there grew straggling bushes of **sloe and spiny whitethorn**. These had blossomed indeed in the moor's bleak springs long before Here, too, flourished a frowning drift of **nettles**—their sour odour haunting the air. (“Broomsticks” C pp.308-09.)

この他に出てくる植物はツタとイバラ（の茂み）である。草花や灌木が現れても、花を咲かせているのは遅咲きのバラぐらいである。したがって、全体的に薄暗い雰囲気漂ってくる。春に花が咲けば美しい灌木も今は棘だらけだったり、もつれていたり、かえって暗さと寂しさを強調しているようである。

ある日のこと、サンザシとイバラの茂みの向こうの見過ごしされていた場所に（“in the neglected patch beyond the bushes of **whitethorn and bramble**” C p.314）、それまで彼女が見たことのないたくさんの足跡を見つける。まるで箒の柄ほどの大きさの足跡に **Miss Chauncey** は驚き、心を乱される。これは主人公の日常では自分でもあまり意識していない、あるいは認めたくない心の奥深い部分と解釈できる。なぜなら、家がきちんと管理され、十分意識された場所であるのに対し、箒の杖の跡らしいものがあつた庭の隅は普段は足を踏み入れることもない草木の生い茂った場所で、彼女自身が見たくない無意識の領域と考えられるからである。だがある日その場所へ行ってみると、そこにはそれまで自分が眼をつぶっていたことを知っているもう一人の自分がいたのである。つまり、それまで自分が捨てておいた無意識を探ったのである。棘のある灌木の茂みに隠されていたというのがそのことをよく表している。

3. 果実の効用 “The Lovely Myfanwy”

お伽話の分野に入るのであろうこの物語の主人公は領主の娘である美しい **Myfanwy** で、彼女の心を射止めようと、若者（後に王子とわかる）は魔法のリンゴを贈る。このリンゴ

は樹木ではなく、あくまでも果実として扱われている。

旅のジャグラーに変装した王子が **Myfanwy** に差し出した果物の取り合わせ—ザクロ、カリン、レモンによく似たシトロン、オレンジ、ネクタリン—の中から、彼女が思わず手を伸ばしたのはリンゴだった。このリンゴの皮を一口齧った瞬間は美しいの詩の一節のようである。

The sharp juice of **the fruit** (i.e. the apple) seemed to dart about in her veins like flashing fishes in her father's crystal fountains and water-conduits. It was as if happiness had begun gently to fall out of the skies around her, like dazzling flakes of snow. They rested on her hair, on her shoulders, on her hands, all over her. And yet not snow, for there was no coldness, but a scent as it were of shadowed woods at noonday, or of a garden when a shower has fallen. Even her bright eyes grew brighter; a radiance lit her cheek; her lips parted in a smile.
(“The Lovely Myfanwy” C p.129.)

娘を溺愛する領主の父のために、半ば軟禁状態の生活を送っている **Myfanwy** がそれまで味わったことのない魂の自由と喜びを感じた一瞬である。その喜びと王子への愛に支えられた **Myfanwy** は、それまで一度も逆らったことのなかった父親へ自分の気持ちを訴える。驚いた父親が同じリンゴを齧ると身体に異変が生じる。その様子は以下にあるようにドラマティックに描かれている。

It is in a *moment* that cities fall in earthquake, stars collide in the wastes of space, and men choose between good and evil. For suddenly —his mind made up, his face all turned a reddish purple—this foolish lord lifted **the apple** to his mouth and, stalk to dried blossom, bit it clean in half. And he munched and he munched and he munched.

He had chawed for but a few moments, however, when a dreadful and continuous change and transformation began to appear upon him. It seemed to him his whole body and frame was being kneaded and twisted and wrung in much the same fashion as dough being made into bread, or clay in a modeller's fingers.

(“The Lovely Myfanwy” C pp.134-35.)

領主はロバに変身してしまったのである。なぜ齧る人によって変化が異なるのか、その答えを「リンゴの唯一の効能が、実はそれを味わった人の、その人らしさをよりきわだたせるところにある（“the sole virtue of the apple was that of making any human who tasted it more like himself than ever.” C p.134）」と de la Mare ははっきり書いている。このリンゴによる呪いを解いたのはなんとニンジンである。なぜニンジンを食べることで元の姿に戻ることができるのか、それについても de la Mare は王子の言葉を借りて説明している。

‘. . . . There is but little difference, it might be imagined, between a wild apple and a carrot. But then, when all is said, there is little difference in the long sum between any living thing and another in this strange world. (“The Lovely Myfanwy” C p.145.)

この王子の台詞には注目すべきである。なぜそうなのかという疑問を解明することなく、曖昧なまま話を終わらせる手法をよく用いる de la Mare がこのように理由を説明するのは珍しいからである。

この作品には、リンゴという語が何度も出てくる。リンゴといえば *Snow White*（『白雪姫』）を思い出すが、ここでは誰も死ぬ（仮死状態になる）わけではないし、悪意から出されたリンゴでもない。もともと、リンゴは中世時代から魔法の木であった。¹⁵ さらに、齧って変身するモチーフは *Alice* を思い出させる。*Alice* は他人から見れば身体が大小に変化するだけだが、自分が誰だかわからないと言っていることから、*Alice* もまた変身したと解釈できるだろう。

この物語はいささか教訓的だが、魔法のリンゴがその傾向を和らげ、ストーリーをファンタジーに変える大きな効用を持っている。

4. 主人公の盛衰に反応する植物 “Lucy”

Collected Stories for Children の中で最も多種の草木が描かれている作品は“Lucy”である。“Lucy”は *Cinderella*（『シンデレラ』）のモチーフの変形といえる。3人姉妹の末っ子 Jean Elspeth は、実の姉妹であるが全く似ていない2人の姉にいじめられている。裕福な家庭に育ったが、破産後は経済的に窮地に立たされる。貧しい生活に文句を言わず、役にたたない姉たちの分まで家事を引き受け、Jean Elspeth は朝から晩まで忙しく働く。

しかし残念ながら **Jean Elspeth** には王子は現れず、一人身のまま、姉たちを看取り、最後には老いて死を待つばかりになる。

この **Jean Elspeth** を描写するのにどのような草花が用いられているのだろうか。

Sometimes it (Jean Elspeth's face) looked almost centuries older than either of her sisters', and then, again, sometimes it looked simply no age at all.

It depends on what she was doing Jean Elspeth . . . looked not a minute older than looks a **harebell**, or a whinchat, perched with his white eyebrow on a **fuzz-bush** near a **lichenous** half-hidden rock among **the heather**.
(“Lucy” C pp.149-50.)

なぜイトジャシン (a harebell) なのか、その理由は定かではないが、一般に詩人の好む草花で、花言葉は従順 (submission)、悲嘆 (grief)、誠実 (truth) であり¹⁶、**Jean Elspeth** のイメージにふさわしい。大人しい**Jean Elspeth**は裕福な時も、貧しく女中のようになっても、姉たちに逆らうことはないし、常に自分の気持ちに正直である。イトジャシンはほっそりした小柄な多年草で、薄青や明るい青色（ときには白色）の花を咲かせる。その姿は**Jean Elspeth**を連想させる。そして皮肉にも、姉たちもまた「内面は霜に凍えた秋の花のように萎びてしまった」(“. . . , poor Tabitha and Euphemia . . . had drooped within **like flowers in autumn nipped by frost**.” C p.167.) と花で描写されている。

家が没落しても、一日中働き通しでも、**Jean Elspeth** は何もすることのなかった以前より楽しい日々を送っている。それは家とその周辺の変化にも現れている。「石の館」(“Stoneyhouse”) と呼ばれる大きな四角い家は、豊かな頃はすべてがきちんと整理整頓されていて、というよりされすぎていて堅苦しく息がつまりそうだった。そんな場所には草木も近寄らない。

No tree dared cast a shadow upon them, no creeper crept.

(“Lucy” C p.151.)

There never was a garden 'kept' so well. The angles of the flower-beds on the lawn—diamonds and lozenges, octagons, squares, and oblongs—were as sharp as if they had been cut out of cardboard with a pair of scissors. Not a blade of grass was out of place. . . . As for a weed, let but one poke its little green bonnet above the black

mould, it would soon see what happened. (“Lucy” C p.156.)

上記のような庭では花の名は必要ない。なぜなら何を植えても味気ない同じものに見えるからである。経済的に困るようになると、家は汚れ、整理整頓とはかけ離れた状態になっていくが、その方が人間にとっても気楽で住みよい。その気持ちの余裕が草花を引き寄せるのだろう。

There was, too, a boot cupboard, And when, by chance, Jean Elspeth looked in one sunny afternoon, there hung within it a marvelous bush of **Traveller’s Joy**, rather pale in leaf, but actually flowering there; (“Lucy” C p.165.)

このだらしないが楽しい変化は家の中だけでなく外でも起きる。

. . . , wildness had begun to creep into the garden. Wind and bird carried in seeds from the wilderness, and after but two summers, the trim barbered lawns sprang up into a marvelous meadow of **daisies and buttercups, plantains, dandelions, and fools’ parsley, and then dock, thistle, groundsel** and feathery grasses. **Ivy, hop, briony, convolvulus** roved across the terrace; Hosts of the Tiny blossomed between the stones. **Moss**, too, in mats and cushions of a green livelier than the emerald, or even than a one-night-old **beech-leaf**. Rain-stains now softly coloured the white walls, as if a stranger had come in the night and begun to paint pictures there. And **the roses**, in their now hidden beds, rushed back as fast as ever they could to bloom like **their wild-briar sisters** again. (“Lucy” C p.166.)

上記の植物は英国ならどこにでも見られる、誰もが知っている野草である。ブリオニア (briony=bryony)、キンポウゲ (buttercup)、ヒルガオ (convolvulus)、タンポポ (dandelion)、ヒナギク (daisy)、ギンギシ (dock)、アエツス (fool’s parsley)、ノボロギク (groundsel)、ホップ (hop)、ツタ (ivy)、オオバコ (plantain)、アザミ (thistle) と 12 種類あり、色も白、ピンク、黄、紫、青、緑など様々だが、第 1 章の分類結果からもわかるように、白と黄が中心である。灌木は野バラ (briar) とバラ (rose) で、白またはピンクが一般的であるから、野草と色は重なる。野草にしろ、灌木にしろそれほど濃い色

合いではなく、自然の柔らかい配色である。この花のパレードが主人公の精神的幸せ、自由の喜びを表していることはいうまでもない。それらが豪華な温室咲きの蘭や百合や牡丹ではしっくりこない。（ちなみに **de la Mare** の作品に蘭は見当たらない。）また、ともすれば暗いじめじめしたイメージをもつ苔が緑の敷物とクッションを作り出しているのがおもしろい。つる草が多いのは崩れていく石の館の醜い姿を覆い隠すためだろうか。上記のシーンが言わば物語のクライマックス（中詰）であり、この後は主人公の老いとともに少しずつ全てが後退していく。

最後に年老いた **Jean Elspeth** が再びこの館を訪れたとき、すでに住む人もなく廃墟のようになってしまっていた。だが、館は木々や草花に囲まれ、静けさの中で嘆いているのではなく、安らかに休息しているように彼女には思えた。それは **Jean Elspeth** の気持ちと同じだったのである。

It was on an autumn afternoon, about five o'clock, and long shadows were creeping across the **grasses** of the forsaken garden when Jean Elspeth came into sight of Stoneyhouse again, . . . the pond having become choked with **water-weeds**, . . . , and **creepers** had rambled all over the wide expanse of the walls. ("Lucy" C pp.171-72.)

. . . , for it (i.e. Stoneyhouse) seemed with **its trees and greenery** in this solitude to be uncomplaining and at rest. And so, too, was she. It was as if her whole life had just vanished and flitted away like a dream, leaving merely her body standing there in the evening light under **the boughs of the great green chestnut-tree** overhead.

("Lucy" C p.173.)

家の繁栄と衰退が主人公の心の変化が重なり合って、それに草木が融合しているという興味深い短編小説の描写である。人間が最後は土に戻るように、朽ち果てていく館は名もない木々や草花に囲まれ、やがてそれらに溶け合っていくというのだろう。

5. 生と死を見つめる植物 “The Almond Tree”

“Lucy”に対して、*Best Stories of Walter de la Mare*の中で最も扱う植物が多いのは“The Almond Tree”である。この作品の中で幼い頃の思い出を語る主人公Nicholasが少年時代を

過ごした家は母の持ち家で、ヒース (**heath, heather**) の荒野にあった。ヒースは荒野では踏み込む人の足を阻むほどにびっしり生い茂る。人を寄せ付けない厳しさを持つ反面、人間生活を豊かに支えている¹⁷というが、まさにそれは**Nicholas**一家の状態である。両親とも仕事をしている様子は全くないにもかかわらず、人を雇って暮らす余裕がある。父親は少しばかり近所付き合いがあるが、**Nicholas**と母親は世間から孤立していると言わざるを得ない状況にある。(事実、葬式以外でこの家に客が来ることはなかった。)

Nicholas 一家の庭やその周囲に咲く草花と樹木は、クロッカス (**the crocuses**)、ニオイアサセイトウ (**the wallflowers**)、スミレ (**the violets**)、モミの樹やワラビ (“**a rambling wood of fir-trees and bracken**” B p.8)、口笛のような音をたてる寂しそうなニレの樹 (“**the bleak and whistling elms**” B p.8)、果樹園のリンゴなど種類が豊富である。その中で、**Nicholas** が年老いても何よりもよく覚えているのは、あのはかり知れないほど素晴らしいハリエニシダの咲くヒースの荒野だ (“**best of all I remember the unmeasured splendour of the heath, with its gorse**” B p.8) という。ハリエニシダが de la Mare に好まれ、多くの作品で登場することは先に述べたが、この作品では特に力を入れて描かれている。

But when we had come out of the village on to **the heath**, in the bare keen night, as we walked along the path together between **the gorse-bushes**, now on turf, . . . , never before had he (i.e. **Nicholas's** father) seemed so wonderful a companion. He told me (i.e. **Nicholas**) little stories
(“The Almond Tree” B p.14.)

妖精とハリエニシダとの関わりは de la Mare 独自の発想に思われるが、妖精の好む花と言われているサクラソウやキバナノクリンザクラと同様、黄色の小柄な花であるという共通点がある。この物語では父親と母親の仲がしっくりいかず、父親は不在がちで母親はヒステリックになるという状況で、間にはさまれている子どもの **Nicholas** はひとりぼっちで放っておかれるため、しばしば空想の世界に逃げ込む。そのような彼と父親との仲をハリエニシダが埋めてくれたのは、妖精の力によるのだろうか。しかし皮肉にも、父の自殺死体を息子の **Nicholas** が発見する前に丁寧に描かれているのもまたハリエニシダの描写なのである。

The snow lay crisp across its perfect surface, mounded softly over **the**

gorse-bushes, though here and there a **spray of parched blossom** yet protruded from its cowl. . . . I saw on **the bushes** too the webs of spiders stretched **from thorn to thorn**, and festooned with crystals of hoar-frost. . . , and heard afar a thrush pealing in the bare **branches of a pear-tree**; and a robin startled me, so suddenly shrill and sweet he broke into song from a **snowy tuft of gorse**.

(“The Almond Tree” B p.28.)

愛する父親が死ぬ直前に見た光景はそれが特に意味を持たないものであっても、少年の心に深く焼きつき、一生忘れられない思い出となったのであろう。それはまた、詩人 de la Mare が幼い頃に彼自身の心の奥に刻まれた光景でもあったのだろう。

さて、前述の引用からもわかるように、ハリエニシダの次に重要視されるのはヒースである。そもそも Nicholas が子ども時代を過ごした家は広々としたヒースの荒野の外れの小さな緑の窪地の中に立っていた (“The house . . . stood in a small green hollow on the verge of a wide heath.” B p.8)。世間との交渉があまりない家の孤独さは、周りがヒースの荒野であることで一層強調される。さらに、父の浮気という暗い影が一家に降りかかり始めると、ヒースの荒野には濃い霧が立ち込め、細かい雨が降り続く (“And that night was very misty over **the heath**, with a small, warm rain falling.” B p.17.)。その夜、父は帰って来なかったのである。そして父親の葬式後に皆で歩くヒースの荒野にはもの悲しさが一面に漂う。

父の愛人の家が“the Thorns”というのも見のがせない。thornはサンザシ（あるいはイバラ）で、妖精が出没する¹⁸と信じられ、de la Mareが好んで使う灌木である。

At a little distance from me grew a **crimson hawthorn-tree** that often in past Aprils I had used for a green tent from the showers; but now it was closely hooded, darkening with its faint shadow the long expanse of unshadowed whiteness. Not very far from **this bush** I perceived a figure lying stretched along the snow and knew instinctively that this was my father lying here.

(“The Almond Tree” B p.29.)

サンザシは「五月に咲く花」(mayflower)と呼ばれている。¹⁹ そのサンザシがまだ雪の中にある状態であるのは当然ながら季節が冬であることを表しているのだが、Nicholasの

家庭が冬の状態であることも暗示している。しかもその隠れた茂みのそばでNicholasは父親が自殺して倒れているのを一人で発見する。死体の描写は一切ない。読者の心に残るイメージに悲惨さはない。あるのは美しい自然の中にある深い悲しみというイメージであり、その美しさを演出するのは雪とサンザシである。

しかし、この作品で最も重要な樹木はタイトルにあるアーモンドの樹である。

‘As far back as brief memory carried me, it had been our custom to make a Valentine’s feast on the Saint’s day. This was my father’s mother’s birthday also. . . . And I remember on this day to have seen the first **fast-sealed buds upon the almond tree.**

(“The Almond Tree” B p.23.)

記述はわずかでも上記は鍵となる文である。タイトルにもあるアーモンドがクライマックスあたりでやっと登場するのである。無頓着に読むとこの文はうっかり見落してしまうだろう。

孤独だが観察力に優れた少年の眼を通して、両親の激しい言い争い、父親の浮気、母親のヒステリックな感情の乱れ、父親の自殺、そして弟の誕生が鋭く描かれる。結末は冬の聖バレンタインの日に迎える。アーモンドの樹の枝に蕾を見つけたという出来事は、それまでNicholasも読者も全く気づかなかった弟の誕生を暗示しているのだろう。まさに生命の息吹きである。なぜならこの花は聖母マリアの花とされ、**Annunciation Day**の飾り花とされるからである。一般的に、英国で見られるアーモンドの花（白、ピンク）は実より重視され、春に先がけて咲く。²⁰ つまり、一年の中で最も早く咲き出す美しい花である。さらに、「せっかちに花を開いて霜に打たれる上、雪白の花で木を覆うところは、死の装束、あたら放蕩に身を持ち崩す若者を思わせて、**almond**はときに無思慮・無分別 (**indiscretion; thoughtlessness**) の象徴ともされている。」²¹ それゆえにアーモンドにNicholasの父親を重ねることができる。若者とはいえないが、家族を置いて自殺してしまうところは無思慮かつ無分別に他ならない。また、花言葉は希望 (**hope**) であるから、先に述べたNicholasの弟の誕生と結びつく。作品中に一箇所しかアーモンドの記述はなくても、いや一箇所だからこそ、その重みは大きい。

アーモンドがなぜこうまで **de la Mare** の心をとらえていたのかを、**Theresa Whistler** は *Imagination of the Heart: The Life of Walter de la Mare* で次のように説明している。

Over the next three or four years the almond tree constantly haunted his verse and prose as symbol for purity, innocence, promise. He (i.e. Walter de la Mare) used it like a private talisman. A bare mention of that tree in passing gives one story, 'The Almond Tree', its title, symbolising the tale's final twist, by which all is summed up, to end on a note pregnant with hope of life out of death. But more of that later.²²

To a child brought up in the suburbs, like de la Mare, the sudden bursting of almond-blossoms from sooty stems, must have been one of the most vivid signs of spring. One thinks also of his habit as a choirboy (noticed by his neighbour in the St Paul's stalls) of underlining biblical passages that had taken root in his imagination: 'And the almond tree shall flourish, and the grasshopper shall be a burden, and desire shall fail: because man goeth to his long home, and the mourners go about the streets.' Ecclesiastes here pins to the almond tree just de la Mare's own talismanic value for it. All the evidence suggests that this biblical imagery was the catalyst for the story, setting the tone of its truth and supplying its 'glamour of reality'.²³

Whistler は、聖書の節を強調する習慣は de la Mare が聖歌隊の少年だったことと関係があると書いているが、もっと幼い頃から最愛の母親に聖書を読んでもらった経験にさかのぼると思われる。ここで聖書が出てくるのはアーモンドの木がカナンの地では最高の果樹の一つだからである。

最後にもうひとつ取り上げるべき花がある。それは父親の愛人が Nicholas に案内されてそっと参加した葬儀で棺に捧げたマツユキソウ (snowdrop) である。

'Miss Grey took a little bunch of snowdrops from her bosom, and hid them in among the clustered wreaths of flowers; . . .

("The Almond Tree" B p.35.)

マツユキソウは花の白さから死や災いと結び付けられることから、葬儀には最適であろう。しかも聖バレンタインデーとも結びつく²⁴という。時期的にも場面的にもこれほどふさわしい花はない。

6. 人の置かれた状況を表す植物 “All Harrows”

*Best Stories of Walter de la Mare*の中で“The Almond Tree”に次いで植物が多い作品である“All Harrows”は、他の作品とかなり異なる内容と雰囲気を持つ。作者自身を思わせる語り手である「私」が8月の午後3時過ぎに、海辺の緑の崖の上に立つ大聖堂にやって来る。その寂れ果てたたたずまいに胸を強く打たれた「私」はオール・ハロウズ大聖堂をひと目見るなり疲労も苛立ちも消え去り、すっかり見とれてしまう。そしてこの大聖堂をながめていると、それが固有の生命を持っていると信じ込まされてしまう。このように英国の小説では、家が意志をもった生命体として扱われる場合がある。de la Mareの場合もその例に漏れず、家が主人公と一体化していたり（前出の“Lucy”）、逆に敵視している（“Miss Jemima”）ことがある。

このオール・ハロウズ大聖堂の近くの丘にある草花はなんともわびしいが、独特の雰囲気を作り上げている。

... and always stone walls, discoloured grass, no flower but **ragged ragwort, whited fleabane, moody nettle, and the exquisite stubborn bindweed with its almond-burdened censers, . . .**

（“All Harrows” B p.290.）

おそらく他の作品ではみられないノボロギク（ragwort）は毒麦（ray-grass）と共に妖精の間に合わせの馬（妖精はfairies'-horseと呼んで、この草にまたがって空中を飛ぶという）として使われる。²⁵ 妖精たちが大好きなノボロギク（またはサワギク）の葉は妖精たちがそこに逃げ込むため、妖精よけに使うことはできない。²⁶ このノボロギクとヒメジョオン（whited fleabane）はどちらもヒナギクに似た黄色い花を咲かすが、ここでは色あせた姿をさらし、イラクサ（nettle）もマイナスのイメージを強く打ち出し、草花の生気のなさが大聖堂の寂れ果てた姿に相乗効果を与えている。それは暑い日の午後に9つの丘を越えて大聖堂までやって来てうんざりしている「私」の気持ちとも通じるようである。

大聖堂で12年以上も堂守りを務めてきた老人の話によれば、そこには悪霊の力が及んでいるという。自分が仕えた5人目の司祭長がさらわれ、発見されたときには白痴同然になっていたのも悪霊のせいだと老人は信じている。彼の案内で聖堂の中に入った「私」は、途中、異様な振動音やきしみのような音が聞こえてきたり、何か小さな生き物が壁の後ろ

にすばやく隠れるのを見たような気がしたりした。幻聴なのか、錯覚なのかは曖昧なままで解明されない。大聖堂では神とは別の力が作用していると断言する老堂守を狂人と「私」は見なす。

当然のことながら、石の建築物である大聖堂の中では植物の描写は全く出てこない。大聖堂から出てきて再び地に足をつけた直後にあるのは以下の描写である。

... we made our way up a deep sandy track, bordered by clumps of **hemp agrimony and fennel and hemlock**, with **viper's bugloss and sea-poppy** blooming in the gentle dusk of night at our feet. The air was mild as milk—a pool of faintest sweetnesses—**gorse, bracken, heather**, and not a rumour disturbed its calm, We paused together beside a flowering bush of **fuchsia** at the wicket-gate leading into his small square of country garden.

(“All Harrows” B pp.322-23.)

キンミズヒキ (**hemp agrimony**)、ウイキョウ (**fennel**)、毒ニンジン (**hemlock**)、シベナガムラサキ (**viper's bugloss**)、ツノゲシ (**sea-poppy**)、フクシア (**fuchsia**) はこの作品のみに登場する植物だが、ハリエニシダ (**gorse**)、シダ (**bracken**)、ヒース (**heather**) はたびたび現れる植物である。ドクニンジンは異臭と苦味を持ち、その実は猛毒があり、魔女が呪いや悪魔や魔物の呼び出しに用いたため、魔女の草として英文学ではしばしばとりあげられてきた。²⁷ **viper's bugloss**の**viper**は毒蛇、マムシを表す。**sea-poppy**の**poppy**だけとりあげれば、一般には縁起の悪い花で、屋内に持ち込むのを嫌う地方もある。²⁸ **hemp agrimony**の**hemp**は麻、大麻を意味し、麻酔性を持つ。こうしてみると、恐ろしい大聖堂から出てきた直後に目にする花は不吉な意味や内容を持ったもので、「私」がまだ大聖堂の影響下にあることをほのめかしているようだ。大聖堂から少し離れると、ハリエニシダ、ヒースなど英国人に馴染みの深い灌木が現れ、やっと悪霊の支配下を離れ、普通の世界に戻ったような感じを与える。

この作品が暗い恐ろしい雰囲気がありながらも植物が多く扱われているのは、語り手である「わたし」が大聖堂に入る前と出てきた後の置かれた状態を描写しているからである。

7. 妖精を誘う植物

植物が多く描かれる作品“*A Penny a Day*” “*The Scarecrow*” “*Miss Jemima*”には妖精あるいはそれに近い超自然的存在が登場するという共通点がある。そのことは前述の“*Lucy*”についてもあてはまる。*Jean Elspeth* にだけ見える *Lucy* という少女は、孤独な *Jean Elspeth* の作り出した幻の心の友だが、心理学的には彼女の分身あるいは心の現れと解釈できる。と同時に妖精と考えることも可能である。いずれにせよ、その存在感は次第に大きくなり、生きた超自然的存在といえるほどにまで成長する。そのため自分以外の人間、すなわち姉（ただし、病気になり死期が近づいている状態にあった）にまで見えるようになる。

Euphemia described her, too—‘A fair child with straight hair. And she is carrying a bundle of **gorse**, with its prickles, and flowers wide open. I can smell the almond smell. (“*Lucy*” C p.169.)

妖精が出現するとき、あるいは現れたのではないかという気配を感じさせる時、たいてい草花の描写が伴う。なかでもハリエニシダが妖精と結びつけて描かれることが多いのが *de la Mare* 作品の特徴であることは、先に述べた通りであり、上記の例でもよくわかる。ハリエニシダの黄色は妖精の金髪と結びついて考えられるのだろう。それが茂みとなれば、妖精の数が増えるものと容易に想像できる。

Yet there also sank to rest the fountain of life’s happiness. In among **the gorse bushes** were the green mansions of the fairies; along the furrows before his adventurous eyes stumbled crooked gnomes, hopped bewitched robins. (“*The Almond Tree*” B p.9.)

妖精といえば、必ず踊りが伴うものだが、その描写をあげてみよう。

On calm summer evenings unearthly dancers had been seen dancing between the dusk and the moonlight on the short green turf at the verge of the sands, where **bugloss** and **sea-lavender** bloomed, and the gulls had their meeting place, gabbling softly together as they preened their wings in the twilight. (“*A Penny a Day*” C p.53.)

buglossとsea-lavenderはこの“A Penny a Day”の作品の中でのみ咲いている。どちらも海辺に咲く野草であることから、この物語の設定状況に適していたのだろう。buglossは草丈 20～70 cmで青い小さな花を、sea-lavenderは 20～50cmで赤みを帯びた、または薄紫色～紅藤色の小さな花を咲かす。²⁹ 青と赤（紫）の色のコントラストは月に光を浴びて映えるのであろう。小さな花は妖精によく似合う。

“A Penny a Day”では、ある日突然小人が貧しい **Griselda** の前に現れ、彼女が農家の畑仕事をできるように、一日 1 ペニーの賃金で家事を全てやると申し出る。だがこの突然の申し出に **Griselda** はあまり驚かなかった。なぜなら、以前から自分の側に誰かがいる気配を時々感じていたからである。

... she had actually caught a fleeting glimpse of a shape, not *quite* real perhaps, but more real than nothing – though it might be half-hidden behind **the bushes**, or peering down at her from **an ivy-shadowed hollow** in the thick stone walls.

(“A Penny a Day” C p.54.)

小人は姿を見せる前から、灌木の茂みに半分隠れていたり、石壁のツタに覆われた窪みから **Griselda** を覗いていた。その全身を表す準備段階として気配を感じさせ、ちらりと姿の一部をみせ、人間の受ける衝撃を和らげていたのだろう。また、「灌木の茂み」や「石壁のツタに覆われた窪み」に姿を隠せるということから身体の高さが想像できる。

上記ほど具体的ではないにしても、下記のような経験は誰にも一度はあるのではないだろうか。ただ、普通の人間は気配を感じるだけにすぎず、実際に何かを目にすることなく過ごしてしまう。

Long before this very morning, indeed, **Griselda** had often caught sight of what looked like living shapes and creatures – on the moorland or the beach – which, when she had looked again, were clean gone; or, when she had come close, proved to be only **a furze-bush**, or a rock jutting out of the turf, or a scangle of sheep’s wool caught on **a thorn**. This is the way of these strangers.

(“A Penny a Day” C p.58.)

最初はただの灌木の茂みから、色合いの暗い（地味な）ツタ、ハリエニシダ（黄色）、イ

バラ（ピンク、白）と色づいてくる。まるで白黒画面からカラー画面に移っていく映像を見ているようである。白、ピンク、黄はデラメアが作品で好む色であり、妖精にふさわしい色合いだと思われる。

サンザシ（イバラ）もまた、de la Mare が好み、妖精と絡めて描かれることが多い。“The Scarecrow”では、案山子が妖精と主人公の少年を結びつける媒体、言い換えれば、案山子は妖精がこの世と異次元の世界を行き来する出入り口として描かれている。その描写にサンザシが使われている。

‘At the far corner of the field under **an old thorn tree** I stooped down once more . . . , and had another long look, and *then* I was perfectly certain I had caught a glimpse of something moving there. It was as if a face had very stealthily peered out of the shadow of the old scarecrow, and, on sighting me under **the thorn three**, had as swiftly withdrawn into hiding again. (“The Scarecrow” C p.81.)

‘When I reached **my hawthorn tree**—and hundreds of years old *that* looked—I stooped down beside its roots very low to the ground, . . . (“The Scarecrow” C p.82.)

‘For a moment or two she (i.e. the fairy) hesitated, then turned as before, and sped away, but now towards **the very thorn tree** from which I had first spied out on her. . . . (“The Scarecrow” C pp.87-88.)

サンザシは古くはローマ時代から厄除けに使われ、神聖な木としても崇拝されてきたという。アイルランドでは魔よけとされる一方、この木には妖精が住んでいて、この木の下に坐っていれば妖精の国へさらわれるという。³⁰ 古くからの言い伝えがある灌木なのだから、de la Mareが妖精と深く関わりがあるものとみなして、繰り返し作品の中で用いても不思議ではない。また、花の色は白またはピンクとde la Mareの好みでもある。

このサンザシと前述のハリエニシダと組み合わせた描写もある。

Gnarled, wind-shorn trees—**hawthorn** and **scrub oak**—grew here and there in the moorland above the sea, and had stood there for centuries among **the yellow gorse** and **sea-pinks**. He (i.e. the dwarf) looked older even than these. (“A Penny a Day” C p.56.)

想像を超える年齢の不思議な小人、すなわち妖精の姿を描くのに草木を用いて、曖昧に、だが想像可能なやり方をしているのは大変興味深い。

第 4 章 比喩表現

Walter de la Mare の作品には詩でも小説でも比喩表現が多くみられる。ここでは植物を用いた比喩表現をいくつかとりあげてみよう。

“a wondrous sheet of **yellow, like crocuses**” (“Physic” B p.257.) は色彩を表す直喩で、極めてわかりやすいが、“the young nurse had lifted her eyelids—**eyes blue as the flower of the chicory.**” (“What Dreams May Come” B p.389.) は一体どんな花かと疑問に思う人は多いだろう。青色の比喩にチコリ（キクニガリ）をもってくるのも珍しい。チコリの花の薄い水色は看護師の冷たい眼にふさわしいと考えたのだろうか。

先に述べたように、de la Mare は苔をふんだんに使っている。“the sofa, the carpet—**deep and thick as moss, but white too itself as snow**” (“Sambo and the Snow Mountains” C p.390.) の苔は暗くじめじめした湿気とはほど遠く、ふかふかのソファやカーペットに例えている上に、色が白いのが面白い。

女性を例えるのに花を用いるのはよくある方法である。女性の美しさや愛らしさを描くにはバラや蘭のように華やかな花、あるいはヒナギクのような可憐な花が用いられることが多いが、以下のように昼顔を使うのは珍しい。

For here was Myfanwy herself. **Lovely as a convolvulus wreathing
a withered stake**, she was looking in at him from the doorpost,
searching his face. (“The Lovely Myfanwy” C p.131.)

草花の名を具体的にあげずに、ただ花として女性を表現する比喩もある。

The Baron gloated on through the pin-hole—watching her as she
stood transfixed **like some lovely flower** growing in the inmost silent
solitude of a forest and blossoming before his very eyes.
 (“The Lovely Myfanwy” C p.129.)

女性の美しさを花で表すなら、身体の成長は樹木で表現される。

... , Myfanwy grew up and grew older as **a green-tressed willow**
grows from a **sapling**. (“The Lovely Myfanwy” C p.119.)

一方、以下のように女性の心の変化に花を使うのは興味深い。

... , her heart blossoming within her **like an evening primrose**,
refusing to be afraid. (“The Lovely Myfanwy” C p.138.)

時間が経つにつれて次第に花開いていく宵待ち草が、心の変化にやさしさを与えている。
自分の心だけでなく、同様に、目には見えないものとして“... , and the future seemed as
sweet with promise **as wild flowers in May**.” (“The Lovely Myfanwy” C p.145.) という
比喩を使った描写もある。

また、身体の身軽さを表現するのに植物を使うこともある。

... at least half the children of Cheriton were now bounding along
the street, **like autumn leaves in the wind**, and all with their faces
towards the East and **the water-meadows**.
(“The Three Sleeping Boys of Warwickshire” C p.102.)

身体から抜け出した子どもたちの魂が不思議な音楽に誘われ、空中を飛び回りながら、妖精のいる水辺の野原へ急いでいる。風に舞う秋の葉（＝落葉）は簡単に目に浮かべることができる。それに比べると、（サル）の動作の軽さをアザミの綿毛で表現する手法は、なるほどと思わせると同時に愛らしさも感じさせる。

But Jasper (i.e. the monkey), even in the least motion of his small
body, turn of the head, of the hand, of the foot, was quiet as flowing
water and **delicate as the flowers beside it**. When he touched, it was
as if thistle-down had settled at his finger-tips.
(“The Old Lion” C p.273.)

同じアザミの綿毛のふわふわした感じが、眼には見えない噂が風に飛ばされて四方八方に

飛び散る様子と見事に一致している表現 “. . . , and gossip flits from place to place **like seeds of thistledown**” (The Lovely Myfanwy” C p.120) もある。

このように、見た目の状態や様子を表すだけが比喩表現の効用ではない。眼にはみえない気持ちや雰囲気表現することも植物には可能なのである。

I watched it (i.e. rain) enthralled; it was **sweet as the sight of palm-trees** to my tired hot eyes, and its roar and motion lulled me for a moment or two into a kind of hypnotic trance. (“Missing” B p.161.)

これは真夏の猛暑の昼間の出来事を描いた作品である。ロンドンの喫茶店で休んでいるうちに雨が降りだす。その雨を気持ちよさそうに眺めている男の描写である。いささか誇張しすぎている感もあるが、熱帯の植物である椰子の木が豪雨に打たれる光景が、暑さにうんざりしている男には小気味よく感じられるという様子が、読者には手にとるようによくわかる。

一方、次の引用は心の病に犯されている孤独な女性の家を訪ねた少年の受けた印象である。

We humans, they say, are enveloped in a kind of aura; to which the vast majority of us are certainly entirely insensitive. Nevertheless, there was **an air, an atmosphere as of the smell of pears** in this small attic room (“Miss Duveen” B p.46.)

セイヨウナシの香りといわれても理解しにくい読者も多いだろう。ただ、セイヨウナシは家族の中から死人が出るというので家に持ち込むのは不吉であるという迷信³¹がある。Miss Duveenが話の最後に精神を病んだまま死を迎えることから、ナシに香りの霊気とは死が近づいていることを意味するものかもしれない。また、Shakespeareの戯曲に登場するナシはほとんど乾燥しているか、萎びていることが多い³²ことも、de la Mareの頭にあっただのかもしれない。Miss Duveenはその病気のせいか、容姿も服装も次第にみすばらしくなっていくからである。

家庭の不和という状況を木の実（胡桃）で表している会話文がある。しかも、中がカビだらけという胡桃は想像しやすいだけに、その印象は強烈である。

There's many a house **looks as snug and cosy as a nut**. But crack it
and look inside! Mildew. ("Crew" B p.118.)

もともと“**Mellow nuts have hardest rind.**”あるいは“**The noise is greater than the nuts.**”³³という成句もあることから、ものを外見だけで判断するのは危険であり、当て外れもある。それを巧みに利用してde la Mareは上記のような皮肉を登場人物に言わせたのだろう。

時間と植物というユニークな取り合わせもある。

And it seemed once more to Tom as if the whole world and his own
small life had floated off into a dream, and that he had stood
watching their movements and their beauty for as many centuries **as**
the huge oak that towered above the farm had stood with outflung
boughs, bearing its flowers and its acorns from spring on to spring,
and from autumn to autumn until this very morning.
("Visitors" C p.366.)

本当は一瞬のできごとなのだが、自分には長い時間たった気がするという体験は誰にでもあるだろう。しかし、その様子を描くのにカシの木とその実（ドングリ）を使うのはユニークな発想である。巨大な樫の木を使うことで、時間の幅も広がる。

前章で妖精を取り上げたが、妖精の姿を描くのは難しい。de la Mare の場合、妖精が居たような居なかったような雰囲気だけを描いたり、妖精の登場する周囲の情景に力が注がれていることが多い。実際に丁寧に描くとしたら、下記のようなややぼかした曖昧な表現になってしまうのではないだろうか。

'She (i.e. The fairy) stood **lovely and motionless as a flower**. And
merely to gaze at her filled me with a happiness I shall not forget but
cannot describe. . . .

'. . . . Everything around me seemed to have grown much more
sharp and clear, even though the light was dim. The flowers were
different, the trees, the birds. I seemed to know within me what the
flowers were feeling—**what it is like to be a plant with green pointed**
leaves and tiny caterpillar feet, like ivy, climbing from its white
creeping roots in the dark earth by fractions of an inch, up the stem

of a tree;

(“The Scarecrow” C pp.83-84.)

‘Yes, I saw her—face to face. . . .

‘I can’t even tell you what she was wearing, but as I recall her at this moment it was as if she were veiled about with a haze like that of a full moon—**like bluebells at a little distance in a dingle of a wood.**

That may or may not be, but I quite clearly saw her face,

(“The Scarecrow” C p.90.)

唯一青いツリガネソウ (bluebell) だけがその植物名をあげている。harebellとも呼ばれるツリガネソウはその形から妖精が鳴らすベルに見立てて **fairy-bells, fairy-ringers** など、また妖精との連想で **fairies’-caps, fairies’-thimbles, fairy-cup** などと呼ばれる³⁴ことから、この花を比喻に用いた de la Mare の意図も理解できる。しかも、「深い森の谷間に遠くほのかに見えるツリガネソウ」とぼかした描写が心憎い。

比喻表現としては **as, like, as if** を用いたものが圧倒的に多いが、“**with an immense round mushroom hat on her head**” (“The Lovely Myfanwy” C p.119)、“**things strange that yet seemed more familiar to her than the pebbles on the path and the thorns on the rose-bushes**” (“The Lovely Myfanwy” C p.123) のように、そうでないものもある。さらには、比較級や最上級を用いた比喻表現もある。

Occasionally she stole out if but for one breath of freedom, **sweeter by far to those who pine for it than that of pink, or mint, or jasmine, or honeysuckle.**

(“The Lovely Myfanwy” C p.121.)

‘**Even the beauty of the gentlest of flowers** may be sullied by idle tongues.’

(“The Lovely Myfanwy” C p.132.)

上記の比較級の比喻表現は自由の空気が花の香より優っているという内容である。ナデシコ (pink) もミント (mint) もジャスミン (jasmine) もスイカズラ (honeysuckle) も、その香りは香水に使われるほど濃厚で魅惑的であることから、それより芳しい自由の空気を吸いたいという主人公の願いは心の底から思う強いものであることが納得できる。それは、美しい清らかな乙女である主人公に合った美しい表現とも言えるだろう。上記の最上級はその美しい乙女を論ず父親の台詞だが、娘を愛する心が最上級となって表れているの

である。

例をあげればきりが無いほど比喩表現が見られる。だが、陳腐なものは少なく、**de la Mare** 独特の表現が多い。そのため、何度か読み返さないと、その裏に隠された意味や詩人の工夫の理由をうっかり見逃してしまう恐れがある。また、英国の植物の知識がないと、その使用理由が理解できないものもあることも確かである。

おわりに

作品における植物の使われ方の分析を試みた結果、その種類の多さは予想以上であった。さらに、花や樹木の大きさ、色、香り、生息地、伝説、迷信が実に巧妙に使われていることに驚く。時には情景描写として雰囲気作りに、時には登場人物の容姿や心理状態を描くために、植物だけでなく、風、雨、石、池など自然界の他のものともからませて使われている。動物を人物に例える描写もあるが、植物に比べると種類は多くはない。しかしだからといって **de la Mare** が草木だけに頼っているわけではない。確かに比喩表現としてのみ使われている場合も含めると、植物が全く姿を見せない物語はない。しかしほとんど出てこない作品もある。それは一体どういう内容だろうか。 *Collected Stories for Children* と *Best Stories of Walter de la Mare* の両短編集から一作品ずつ選んでみると、“The Riddle” と “The Picnic” では植物が一種類しか用いられていない。“The Riddle” ではおばあさんの住む古い家の窓すれすれの所にまで大きなヒマラヤスギ (a great cedar tree) が枝を広げている。第1章の統計表の数には入れなかったが、あえて取り上げれば、古いカシの木でできた櫃 (大型の箱) とポプリの香りがある。これは極めて短い幻想的なストーリーで作品自体が夢のようである。一方 “The Picnic” は極めて現実的で、「クロッカスは北極で花を咲かせようなどとは考えないものですが」と比喩的な使い方をしている。これも統計表からはずした植物を拾ってみると、海草 (sea-weed) と長い灰緑色の草 (“the long grey-green nodding grasses” B p.282) がある。もっとも海草の方は匂いだけで、その姿を見せていない。さらに付け加えれば、ジャムである木イチゴ (ラズベリー) が出てくる。このジャムは小さいが深い意味を持つ小道具である。“The Picnic” は Miss Curtis という独身女性の現実の生活の一部と海辺での片思いのほろ苦い恋の思い出を描いた作品である。思い出をたぐりながら、一女性の心理状態を細かく描いている話にはもっと植物が登場しても不思議

ではないのだが、この作品では植物の代わりをするもの—お茶の入った魔法瓶、小説、夕焼け空など—が揃っていると考えられる。それに対して、“**The Riddle**”は非現実的な話だから、現実的な植物は似合わない。古さを表現するため樹木が使われたにすぎない。

我々人間より先にこの世界に植物は存在していたのだから、植物の登場しない作品がないというのは決して不思議なことではない。人間と同様に、草木も生きているのであり、死んでいくのである。生死を探求することを生涯、作品のテーマの一つにしていた **de la Mare** が生命を育む草木を作品の中に数多く描くのはむしろ当然のことだろう。**de la Mare** は私たち人間を「胡桃の中身ほどの実体はしかない」 (“**we amount to no more than what you could put into a walnut.**” “**Crew**” B p.125.) と言い、「人生は駆け足で進んで行く。豆の蔓のように伸びている」 (“**Life is galloping on. You are sprouting up like a beanstalk.**” “**Alice’s Godmother**” C p.322.) と述べている。やや皮肉がこめられているが、否定できない記述である。むしろ謙虚に受け止めなければならない我々への警告と受け止めるべきであろう。

注

- 1 加藤憲市『英米文学植物民俗誌』（富山房 1976）p.161.
- 2 Ibid., p.170.
- 3 Ibid., p.92, pp.140-42. K. M. Briggs, *The Fairies in Tradition and Literature* (London: Routledge & Kegan Paul, 1977), p.84.
- 4 Walter de la Mare, “Miss Jemima,” *Collected Stories for Children* (London: Faber and Faber Ltd. 1970), pp.177-78. 以後この短編集からの引用は、本文中に短編の作品名及びページ数と C を記すことにする。
- 5 加藤憲市, p.220. 「**furze** には伝承・民話のたぐいがまったくないのは珍しい。」ロイ・ヴィカリー著、奥本裕昭訳『イギリス植物民俗事典』（八坂書房、2001）の **Gorse** の項目には「黄色い花をつけるハリエニシダは、エニシダ **BROOM** と同様に、家に持ち込むのは不吉だとされることがある」(p.191) と書かれてはあるが、それは地方に伝わる俗信で、とくに民話や伝承についての記述はない。
- 6 K. M. Briggs, p.82.
- 7 Walter de la Mare, “The Vats,” *Best Stories of Walter de la Mare* (London: Faber and Faber, 1983), p.394. 以後この短編集からの引用は、本文中に短編の作品名及びページ数と B を記すことにする。
- 8 加藤憲市, p.367.
- 9 Ibid., p.62.

- 10 Ibid.
- 11 Ibid., p.327.
- 12 土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修 『英語歳時記 夏』（研究社、1978） p.333.
- 13 加藤憲市, pp.662-64.
- 14 アランシー・リー著、山室静訳『フェアリー』（株式会社サンリオ、1982） p.162.
- 15 K. M. Briggs, p.84.
- 16 加藤憲市, p.240.
- 17 Ibid., p.255.
- 18 アランシー・リー, p.120.
- 19 ピーター・ミルワード著、中山理訳『英文学のための動植物事典』（大修館書店、1990） p.354.
- 20 加藤憲市, p.12.
- 21 Ibid., p.14.
- 22 Theresa Whistler, *Imagination of the Heart: The Life of Walter de la Mare* (London: Duckworth, 1993) pp.83-84.
- 23 Ibid., p.92.
- 24 加藤憲市, p.595.
- 25 アランシー・リー, p.148. 加藤憲市, p.518.
- 26 K. M. Briggs, p.85.
- 27 加藤憲市, pp.258-59.
- 28 Ibid., p.502.
- 29 クリストファー・グレイ＝ウィルソン著、高橋良孝日本語版監修 『地球自然ハンドブック 完璧版 野草の写真図鑑』（日本ヴォーグ社、1997） p.173, p.191.
- 30 加藤憲市, p.244.
- 31 ロイ・ヴィカリー, p.343.
- 32 ピーター・ミルワード, p.421.
- 33 加藤憲市, p.398.
- 34 Ibid., p.238.